

---

# うらら

千葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うすら

### 【Nコード】

N9107Y

### 【作者名】

千葉

### 【あらすじ】

本日はお日柄も良く、

僕と彼女が偶然再会したのは小田急線の上り電車の中だった。木曜の昼のことで、車内はそれほど混み合っていない。僕がその電車に乗り込んだ二駅後にやってきた彼女は、大きな黒いリュックサックを背負って、手にはチェーンのドーナツ屋の紙袋を提げていた。僕はその時鞆に文庫本を入れ忘れていた為に読書をすることも出来ず、他の乗客たちのように携帯電話を開いてみてもそれで何をしていたらいいものなのかも分からなかった。特になにをするにもせず、また何かを考えることもなく、ただぼんやりとしていた。そのぼんやりした視線はドアの辺りに向けてあったので、駅に着く度に降りて行く人たちの後ろ姿と、新たに乗車してくる人たちの顔をぼんやりと眺めることになった。彼女の顔を眼に留めるに至ったのも、僕がそうして暇を持て余していたからだ。僕が

乗車してきた彼女は視線を車内にさつと滑らせて、それから僕から右に二人分の間隔を空けた席に座った。僕はすぐにそれが彼女であることに気付いていたのだけれど、彼女の方が僕に気付いた様子は無かった。無理もない。何せ僕と彼女が最後に顔を合わせたのはもう九年以上も前のことであり、当時僕たちはまだティーンエイジャーだったのだ。僕たちはその後数々のことを経験したし、たくさんの人々と出会った。そうした月日の中で、彼女が僕のことを忘れてしまっていたとしても、それは自然なことなのだ。悲しむ程のことではない。

新しい人たちが全て乗り終えて、軽快な音をさせながらドアが閉まった。電車がゆっくりと動き始める。僕は相変わらずぼんやりと

ドアの辺りを眺めながら、彼女に声を掛けるべきかしばらく悩んだ。悩んだ末に、よしておくことにした。何せ彼女にとって僕はもう赤の他人かも知れないのだ。こんな平日の真昼間に人気の少ない小田急線の中で、知りもしない（正確に云えば記憶に無い）男に「こんにちは、今日はいいい天気ですね。ところで僕の顔を覚えていますか？」などと話しかけられたりするのはどう考えても気分の良いことではない。僕はただ彼女の三つ隣に腰かけたまま、相変わらず何をするでもなくぼんやりと宙を眺めていた。そして各駅停車に乗り換えるために、次の駅で降りた。

それから四力月ほど経って、また僕は彼女と再会する。その日僕は勤め先の近くにある小さな本屋で雑誌を物色していた。週に一度、火曜日に僕はいつもこの本屋に雑誌を見に来る。いくつか気になるものをパラパラと立ち読み、あるものは買った、またあるものは買わなかったり、そしてまた何も買わずに帰ったりする。

僕はその日大した収穫物を得られず、手ぶらのまま店を出ようとしていた。そこで店の出入り口から一番目立つ位置に並べられたベストセラー本の山を見下ろしている彼女を見付けた。彼女は前と同じ黒いリュックサックを背負っていたが、ドーナツ屋の紙袋は提げていなかった。そういえば前に彼女と会ったあの日、そのドーナツ屋の袋がいつまでも頭に残ってしょうがなくて、僕は仕事の帰りに最寄りの店に寄って定番品のドーナツを三つ買って帰ったのだった。ベストセラーの山は僕の出てきた雑誌売り場とベストセラーの間ど中間辺りにあって、僕はさらに雑誌売り場とベストセラーの間、何も無いスペースでうつかり立ち止ってしまった。それも彼女を見付けた途端に、ピタッという感じで。彼女は異変に気付いたのか、落としていた視線を上げて僕を見た。ドキリ、と胸が鳴ったのが分かった。彼女は頭の奥につつかえた何かを探るように、眉間に皺を寄せ眼を細めた。気付いて欲しいような気もするし、気付いて欲しくないような気もする。もしも彼女が僕に気付いたら、どう反

応じたらいいだろう。彼女から声を掛けてきた場合にはどう返事をするのが適切で、「あ」という表情をしただけだったら、どう僕の方から声を掛けるのが適切なのだろうか。急速度で思考している間に、彼女はふつと僕から視線を外し、そしてまた本の山に戻した。ほつとしたような気持もしたが、がっかりの方が少し大きかった。

僕はすぐに何事も無かったように、普通の顔をして、普通の速度で歩いて、彼女の横を通り過ぎ、そして店を出た。自動ドアが開いて、閉まる。自動ドアが僕を感知しない辺りまで歩を進めてから後ろをちらりと振り返ると、ガラス越しに彼女の背中が見えた。リュックの肩ひもの隙間から見える小さな肩の上に落ちた髪が、とても柔らかそうだった。昼間の豊かな日光を受けているせいか、何だかきらきらして見える。なかなか美しい光景だと思った。だから僕はどうかその髪がいつまでも柔らかくしなやかで、魅力的なものであり続けられるように、その為に彼女がどうか幸福であるようにと、春の日射しに祈ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9107y/>

---

うらら

2011年11月27日09時26分発行